

## 水稲新品種「まいひめ」の主要特性

上原 泰樹・川村 陽一・館山 元春・諏訪 充・横山 裕正・立田 久善\*・  
須藤 充\*\*・藤村 泰樹\*\*\*・三上 泰正\*・堀末 登\*\*

(青森県農業試験場藤坂支場・\*青森県農業試験場・\*\*農業研究センター・\*\*\*青森県営農高等学校)

Characteristics of a Newly Released Rice Variety "Maihime"

Yasuki UEHARA, Yoichi KAWAMURA, Motoharu TATEYAMA, Mituru SUWA, Hiromasa YOKOYAMA,  
Hisayoshi TATSUTA\*, Mituru SUTO\*\*, Yasuki FUJIMURA\*\*\*, Taisei MIKAMI\* and Noboru HORISUE\*\*

(Fujisaka Branch of Aomori Agricultural Experiment Station・\*Aomori Agricultural  
Experiment Station・\*\*National Agriculture Research Center・\*\*\*Aomori Prefectural  
College of Vocational Agriculture)

### 1 はじめに

「まいひめ」は1993年から青森県の奨励品種に採用され、青森県の南部平野地帯、津軽西北地帯及び海岸冷涼地帯等の不適地に栽培されている「むつほまれ」に替えて作付けされることになった。そこで、本報では品種育成の過程で明らかになった「まいひめ」の主要特性について述べ、本品種の普及、指導の参考としたい。

### 2 試験方法

「まいひめ」は1984年青森県農業試験場藤坂支場において「青系89号」(後の「むつほまれ」)を母とし、「ふ系130号」を父として人工交配した雑種後代から選抜された品種である。1988年F<sub>2</sub>世代で生産力検定予備試験並びに障害型耐冷性、いもち耐病性の特性検定試験に供試した。1989年F<sub>2</sub>世代で「相92」として場内における生産力検定試験、特性検定試験並びに依頼先における系統適応性検定試験、特性検定試験に供試した結果、有望と認められたので、1990年より「ふ系159号」の系統名を付し、関係各県に配布して地方適否を検討した。同時に、場内における生産力検定試験を継続するとともに、新たに穂発芽性検定試験、白葉枯病耐病性検定試験、登熟性の調査、搗精試験などを通してより詳細な特性解明を行った。

### 3 試験結果及び考察

#### (1) 形態的特性

移植時の苗丈は「むつほまれ」<sup>1)</sup>並の“やや長”，葉色は「むつほまれ」並の“やや濃”である。本田初期の生育は「むつほまれ」に比べてやや緩慢であり、中期の生育は草丈が「むつほまれ」並かやや短く、茎数はやや少ない。稈長は「むつほまれ」並かやや短く、穂長は「むつほまれ」並かやや長く、穂数は「むつほまれ」並かやや少ない短稈、偏穂重型の粳種である(表1)。稈は「むつほまれ」並の太さで、剛く、耐倒伏性は「むつほまれ」並かそれ以上に強い。粒着は「むつほまれ」並の“密”で、穎色及び稃先色は“黄白”で、芒はない。葉色は「むつほまれ」よりや

表1 生産力検定試験における生育調査成績

品種名	施肥 水準	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	倒伏 程度 (0-5)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )
まいひめ	標肥	8.7	9.15	0.0	73	16.5	466
	多肥	8.6	9.23	0.8	79	16.7	524
むつほまれ	標肥	8.8	9.16	0.2	75	16.5	484
	多肥	8.8	9.23	1.6	80	16.5	551

注. 標肥区は窒素成分量0.8kg/a, 多肥区は1.1kg/aで、それぞれ1988年~1992年, 1989年~1992年の平均値である。

や濃く、止葉の葉身は立ち、草姿は良好である。

#### (2) 生態的特性

出穂期、成熟期は「むつほまれ」より1、2日早く、育成地では“中生の早”，東北中南部では“早生”に属する(表1)。熟色が鮮麗で、登熟は良好である。収量性は「む

表2 生産力検定試験における収穫物調査成績

品種名	施肥 水準	全重 (kg/a)	精玄米 (kg/a)	屑米 (kg/a)	収量 比率 (%)	玄米 千粒重 (g)	品質
まいひめ	標肥	158.0	56.8	5.6	101	21.6	4.6
	多肥	177.3	59.9	7.3	105	21.2	4.9
むつほまれ	標肥	158.0	56.2	3.7	100	21.5	4.9
	多肥	173.8	57.1	4.9	100	20.8	5.6

注. 1.9mmの縦目篩で精玄米と屑米とに選別した。

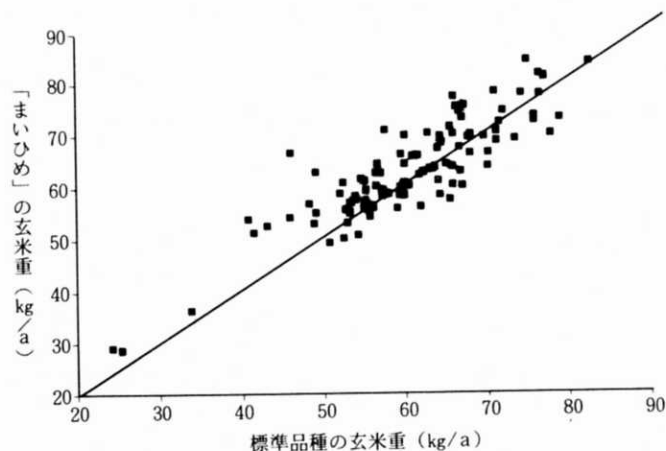


図1 配布先における「まいひめ」と標準品種と玄米重の比較図

つほまれ」並に高く(表2)、全国の配布先における結果でも標準品種より多収を示す試験が多かった(図1)。耐冷性は「むつほまれ」より明らかに強く、“強”である(表3)。いもち病の真性抵抗性遺伝子型は *Pi-a* と推定され、圃場抵抗性は葉いもち及び穂いもちともに「むつほまれ」並の“やや強”である。白葉枯病抵抗性は「むつほまれ」並の“やや弱”である。穂発芽性は「むつほまれ」より発芽し難い“やや難”である。

表3 障害型耐冷性検定結果

品 種 名	出穂期 (月.日)	不稔歩合 (%)	判 定
まいひめ	8.16	47.8	強
中 母 35	8.15	29.1	極 強
ムツニシキ	8.19	44.9	強
タツミモチ	8.17	46.0	強
ふ 系 94 号	8.19	55.5	やや強
レイメイ	8.18	62.3	中
むつほまれ	8.18	72.2	中
ハヤニシキ	8.16	73.6	中
ムツホナミ	8.19	81.7	やや弱
アキヒカリ	8.18	84.4	やや弱

注. 水温を19.5°C~19.8°C, 水深25cm~30cmとし, 約40日間処理した。成績は障害型不稔が多発した1991年を除く1988年から1992年の4年間の平均値で示した。

(3) 品質・食味特性

玄米の粒形は「むつほまれ」よりやや長く, 粒大は「むつほまれ」よりやや大きい“中”である。粒厚は「むつほまれ」よりやや薄い, 千粒重は「むつほまれ」並である(表2)。玄米は光沢があり, 腹白, 心白の発現が少なく, 品質は「むつほまれ」並かやや良好である。搗精は「むつほまれ」並かやや時間を要するが, 搗精歩留り, 精米白度は「むつほまれ」並である。食味は「むつほまれ」よりやや優り, 良好である。

4 栽培上の留意点

「まいひめ」は「むつほまれ」に比較して出穂が1, 2日程度早く, 耐冷性も強いことから「むつほまれ」の不適地帯に栽培されることになったが, 品質・食味, 収量性についても「むつほまれ」に劣らない特性を持つと考えられる。欠点として穂数が少ない点があげられるが, 健苗育成や株数を確保すると共に本田の水管理にも十分注意して初期生育の確保に努めてもらいたい。

引 用 文 献

- 1) 山崎季好, 田名部嘉一, 高館正男, 三上泰正, 有馬喜代史, 川村陽一, 立田久善, 浪岡 実, 金澤俊光, 小野清治, 三本弘乗. 1987. 水稻新品種「むつほまれ」の育成. 青森農試研報 30: 1-17.